

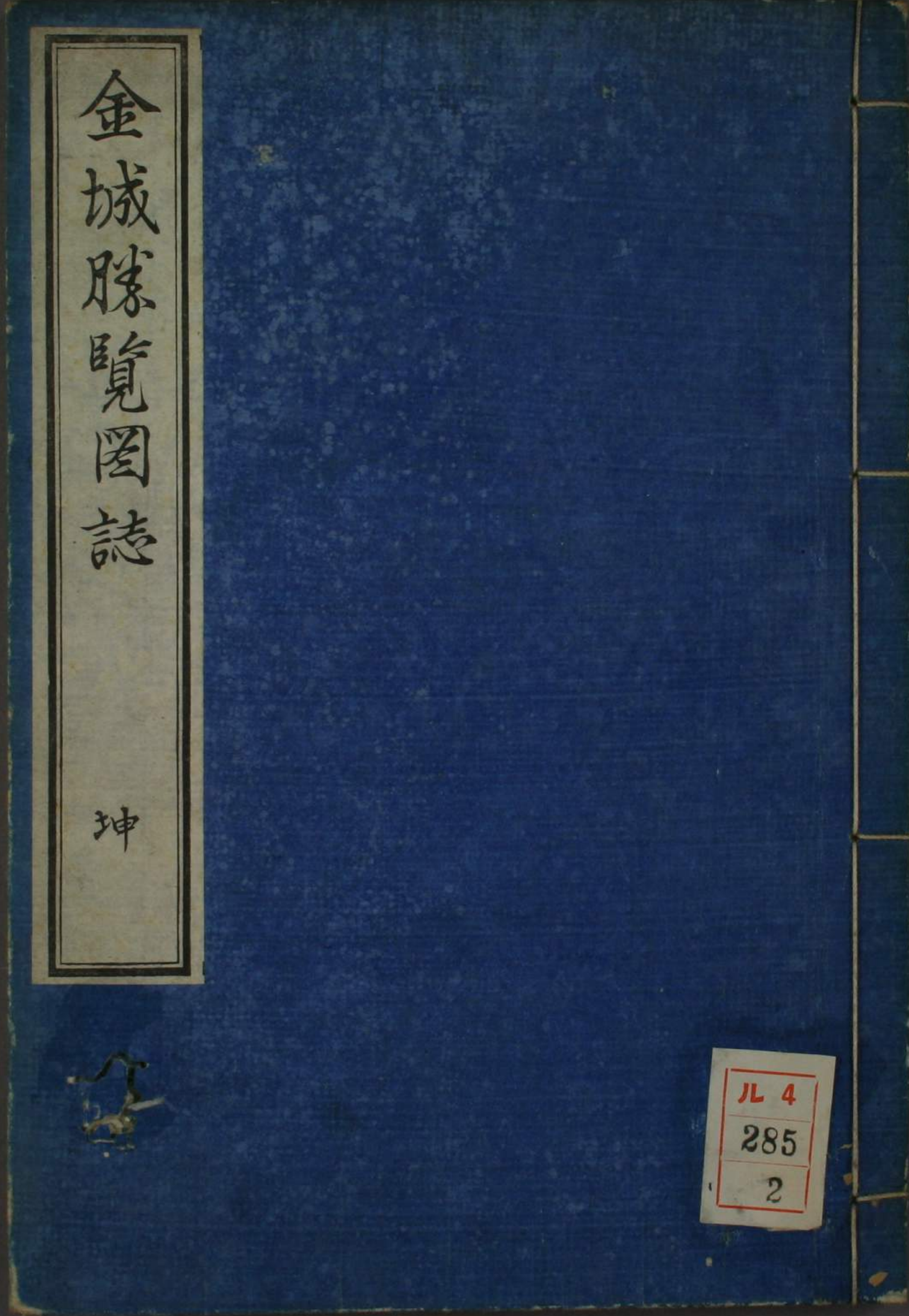


KODAK Color Control Patches

Kodak  
LICENSED PRODUCT

Centimetres

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



金城勝覧図誌

坤

ル 4  
285  
2



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20



四ノ目  
號 285  
卷 二



金城勝覽圖誌

卷之下目錄

- 一 卯辰山
- 一 五本松
- 一 傳燈寺の窟室
- 一 戸室山
- 一 貧人小屋
- 一 野田山
- 一 大乘寺
- 一 冠ヶ嶽城墟
- 一 倉ヶ嶽城墟
- 一 招魂社
- 一 春日山
- 一 醫王山
- 一 猿丸社
- 一 蓮花瀧
- 一 高德公塋
- 一 藤五郎松
- 一 高雄城墟
- 一 富樫氏の館跡

目次



- 一 道今古塚
- 一 河北湖
- 一 小濱神社
- 一 大野湊神社

附録

一 白山略記

- 一 小立林
- 一 桃山亭趾
- 一 金石港

金城勝覽圖誌卷之下

雪湖平岩 著  
松香中濱元重 畫



卯辰山 うたつやま 一名卧龍山金城の良方うしろふ在り高たか大約おほ三十三丈たけ月つき回まわ二里余山脈やまなで東方とうほう戸室山とむろやまは連り西北市街しがいふ交入す东南鈴見村かねみの地ちは接つ西南淺聖川せんせいがわに臨む北方三分の一を春日山かすがやまといふ山麓ふもとに卯辰村あり故ゆゑふ名づく又金澤城門じやうもんの面おもてを以て俗向山ぞくむかひやまといふ山頂さんていを鷲峰じゆほうといふ其絶頂たつていふ小山あり天正五年上杉謙信けんしん此所こゝに壘とりかを築きづく其形かたち茶磨ちやまに似にくまを茶白山ちやしろやまと稱なづく謙信又山の蟠屈ばんくつす



を新て附託山と号けたり又朝倉義景の遺臣堀元近利  
 髪一萬莖坊と唱へ此地に住一小峯は庚申堂を建つ之を  
 庚申塚とす今の地より十間余多く周囲百五十間余 全山赤土  
 て樹木稀あり溪水と名づく唯山汗の聚るもの僅は滴るの  
 芝應三年園山を開拓して地取大ふ愛せり系白山小神社  
 を創し其峰を拓きて社地と之を景雲臺と名づく一名  
春本社造堂中敷 石階三層を築く一の坂二の坂三の坂とす明治  
 元年勅して卯辰神社と稱す社地三千四百二十坪菅原道  
 真公を奉り大已貴神少彦名命を合祀す祠前小蠟石の  
 峰温敷公太宰府の飛松を接ぎ ありあり繪馬堂忠孝廉節  
 の大額ハ温敷公の寄附せらるゝとのあり一の坂を下れば小丘の

己咸泉丘と稱し神水あり亦咸泉といふ二の坂を下りて坦  
 地あり瀧ヶ丘と稱す坂下小池あり石橋を架す池畔は鶴石  
 業平の井筒等あり此所松檜或種々の草木を植う三の坂  
 を下り廣坦の地を日暮ヶ丘といふ西ふる谷を梅溪と唱ふ  
 往時ハ馬谷と稱し謙信系白山陣又吾ヶ峰の北方庚申塚その他乃  
 を石り一時馬を此に止まると云 又吾ヶ峰の北方庚申塚その他乃  
 高き木を切り山崩し谷を填め均し養生所病院の稱 舎密局  
 製菓所の稱撫育所貧民血救所の稱 産物所物産製造所の稱 を建  
 建物凡五棟稱建物十一棟 築一或茶園桑園藥草園を開墾せり其側天然臺落合  
 茶屋御影町と稱する地ハ人家を新築し之を市坊と屬し  
 演戲場馬場大弓場藥湯所あり建て連ねて一時繁華を  
 極めたり一が漸々衰頽して今皆廢せり又山の登路五條あり

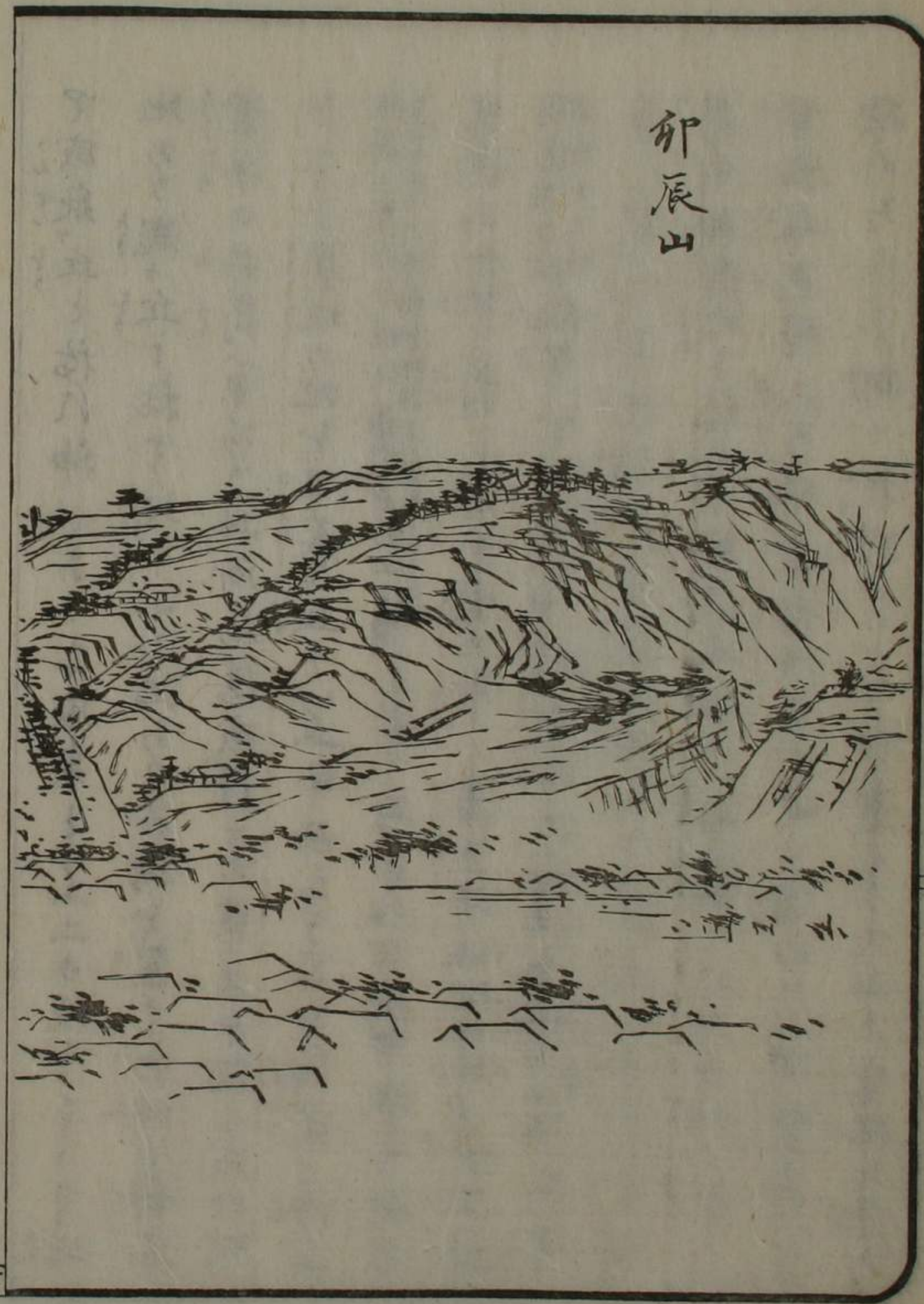




一、本一十番さき  
十番さきより合井十  
廿八日大坂大坂  
廿八日大坂大坂

四月三日

三



卯辰山

下



平常野町より帰厚坂を経て卯辰神社より凡五町  
八幡町より子来坂を経て神社より凡四町鶴谷より凡  
是凡八町より外鈴見村より劫兵衛塚を過ぎて上り又常野  
町の東南頭より登る路二條あり山路狹隘或急として  
甚ふ便あり山上城市を平降し山野湖海一眸の中ありま  
るに絶系筆ふ盡しが

招魂社 卯辰神社の側ふあり東西二十五間南北二十六間面  
積五百二十五坪明治元年北越の役小戦死せし金澤藩  
士八十九名夫卒十九名を奉り又七年伏賀縣の役小戦死せ  
し藩士八名を合祀す三年十二月恭敏公前田慶寧之を創建  
し俸米一千俵を寄附して祭資とせらる今毎歲四月三日

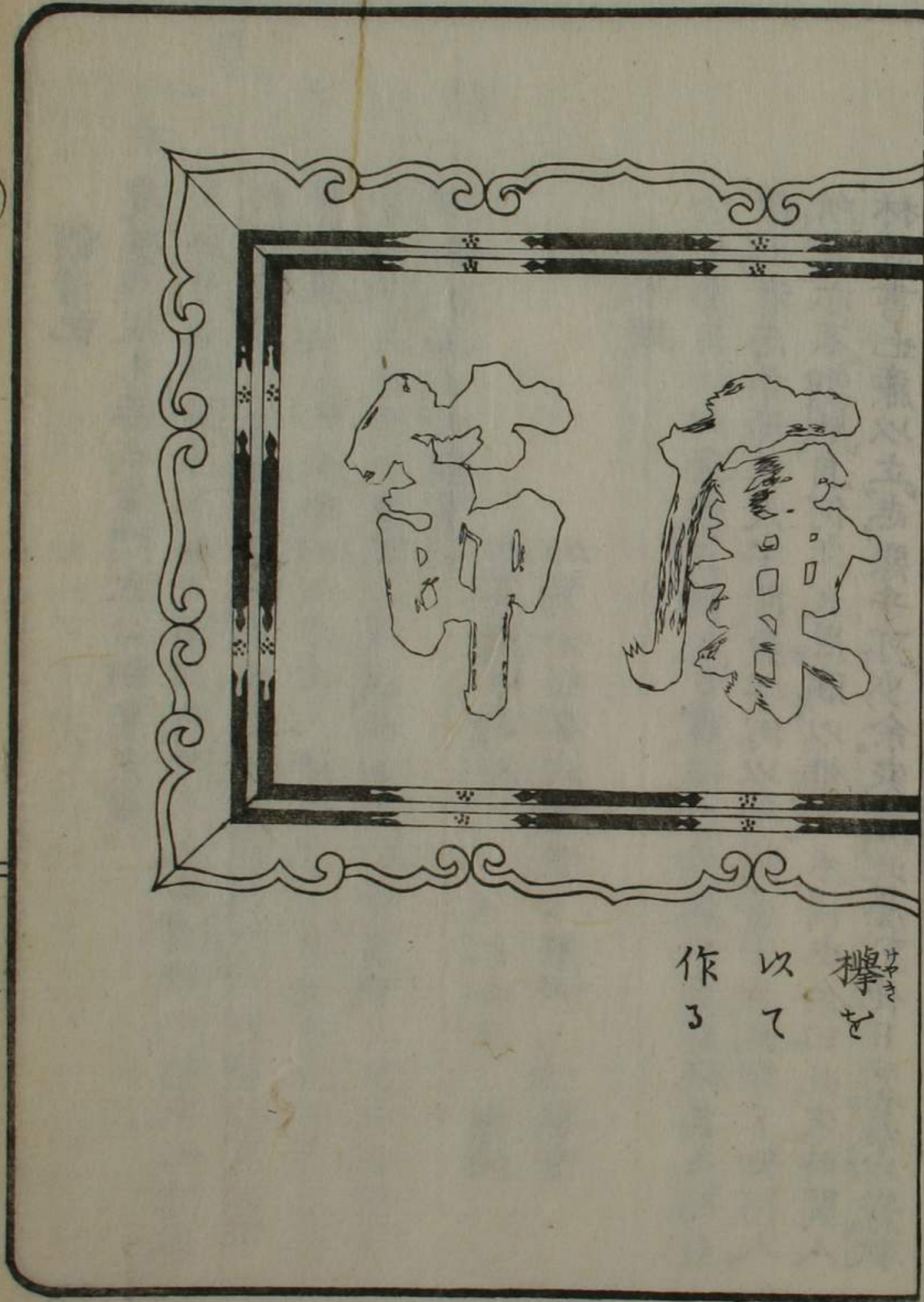
を以て官祭式日と定む十一年九月

聖駕北巡の際祭祀料金若干を賜

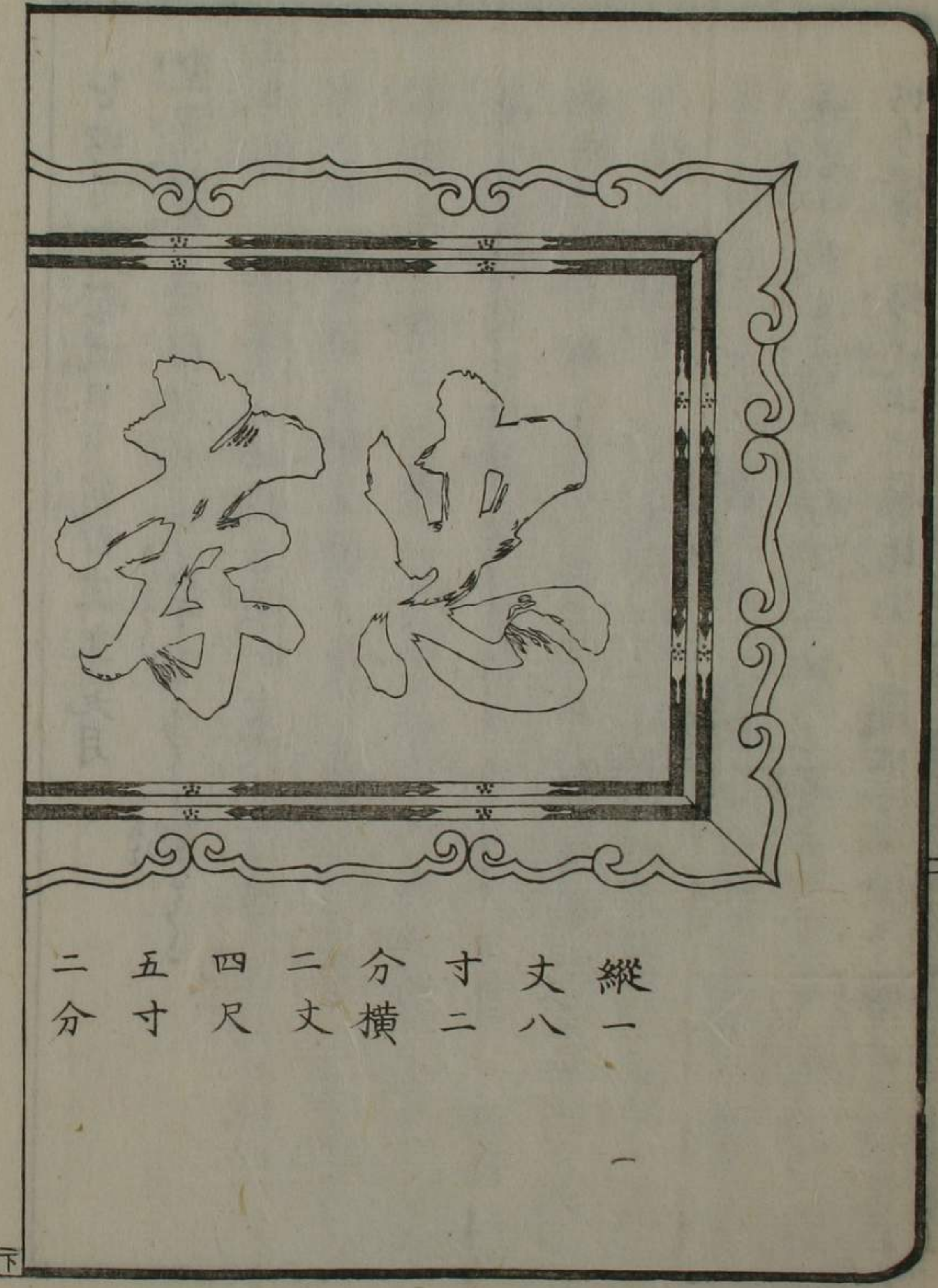
五本松 卯辰山の西端子来町真言宗寶泉坊の地内小

頃り圍三丈許大幹五條ふ分れ直立千尺空は聳ゆる  
歳百年を經くと詳ふせばとつとも勁即龍鬚老て蒼  
蒼たり稀有の松樹あり且松色常夜燈を點し近海船  
舶往來の目標とれ元祿の以俳人柳陰軒句空此地も菴  
を結びて閑居す芭蕉翁北陸行脚の節句空を訪ひて一首  
（ちり柳のしも秋も鐘をきく）を吟ぜり又此南崖は隣る舊  
長谷山觀音院法子洋ふりの地ハ八景の一として秋月は称  
りり嘗て境内小三層塔あり高四十間余下層方三間余兼





擗ヒキ以て作ス



縱一丈八寸二分  
横二丈四尺五分



額背記

慶應戊辰之春我黃門太公朝皇京拜  
天顏蒙溫諭賜盛宴寵光優渥無所不至是固雖曰朝家之特恩  
然非藉神之冥護安能如是哉故歸藩後欲有所報賽偶有秘府  
舊藏墨刻忠孝廉節四大字宋人林焯書而筆法遒勁語意亦精  
要故命工摹雕作匾額以揭諸祠前所以表虔敬之誠也因使  
平聊記事由於額背云

加賀國學助教

臣永山平 謹撰

加賀金谷廣式物頭 臣市河三治 敬書

原本跋

余今春自江南府解兵餉赴甘肅過華陰廟兩廡石碑甚多而最  
傑出者忠孝節三大字問廉字何以獨闕道士云此字不知何人  
所書亦不知闕自何年久思購以補之未得也余曰此宋時閩人  
林焯書也廉以立志惡乎可少余家藏此墨刻他日當摹以寄秋

下

抄余南旋適友人秦中之行因以此字寄之並助刻資庶不使名  
山妙墨等諸缺角之玉盤也

乾隆甲寅孟冬知如皋縣事

江右曹龍樹跋

按五雜俎及書畫譜皆以林焯為明人獨曹龍樹則以為宋  
人未詳孰是今姑從曹跋 市河三治記

應三年の創建して構造殆て精悉を盡せり市坊より遙小

之を望めば翠松の間小徑身えて彫風系と流下小橋く分明

治廿年二月依然塔中より火を發して塔燒るる有り

春日山 又帝慶山と号す卯辰山の北端の小名して河

北郡小金村小属す山上平夷して河北郡の郊野蓮湖を

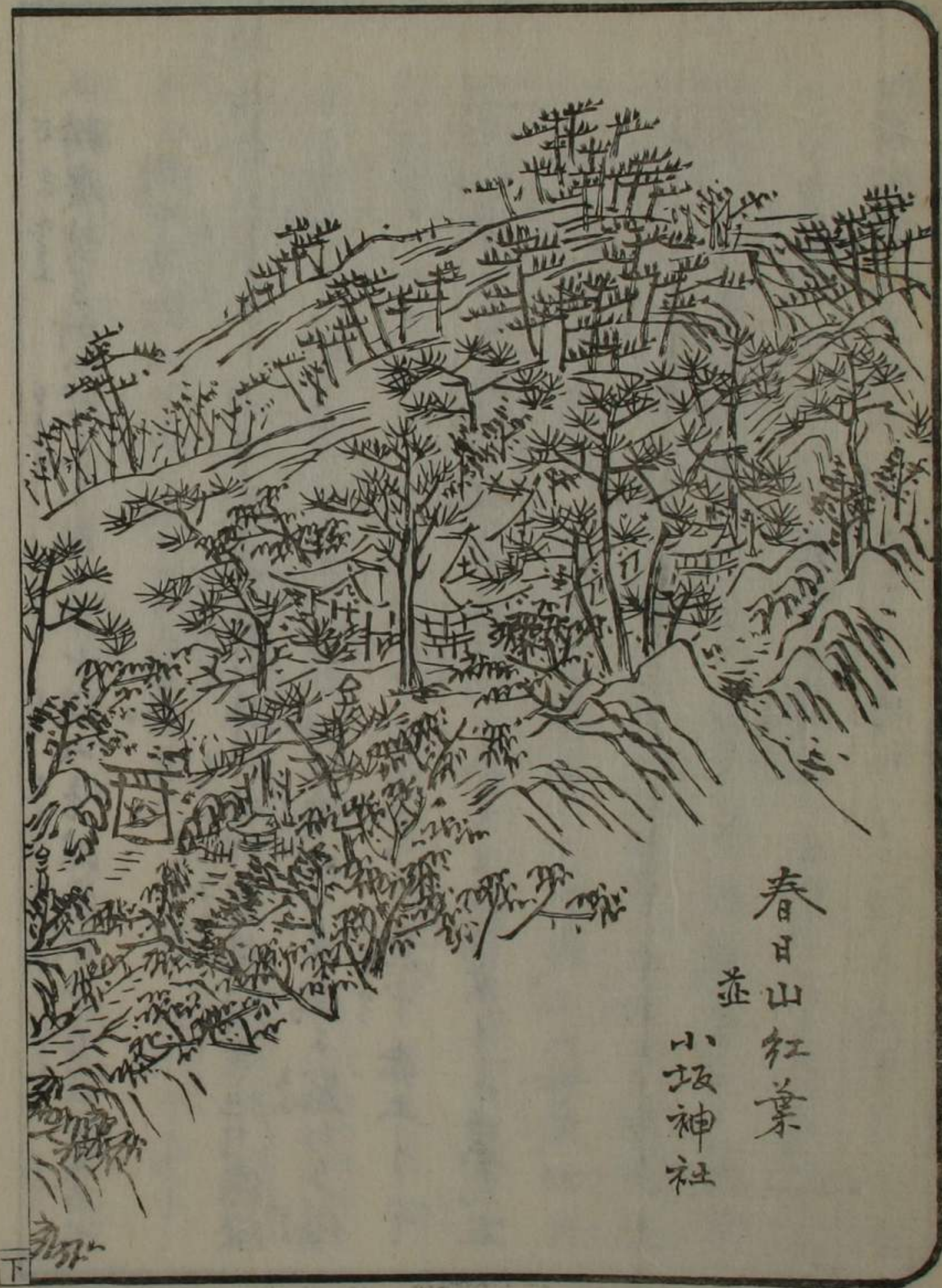
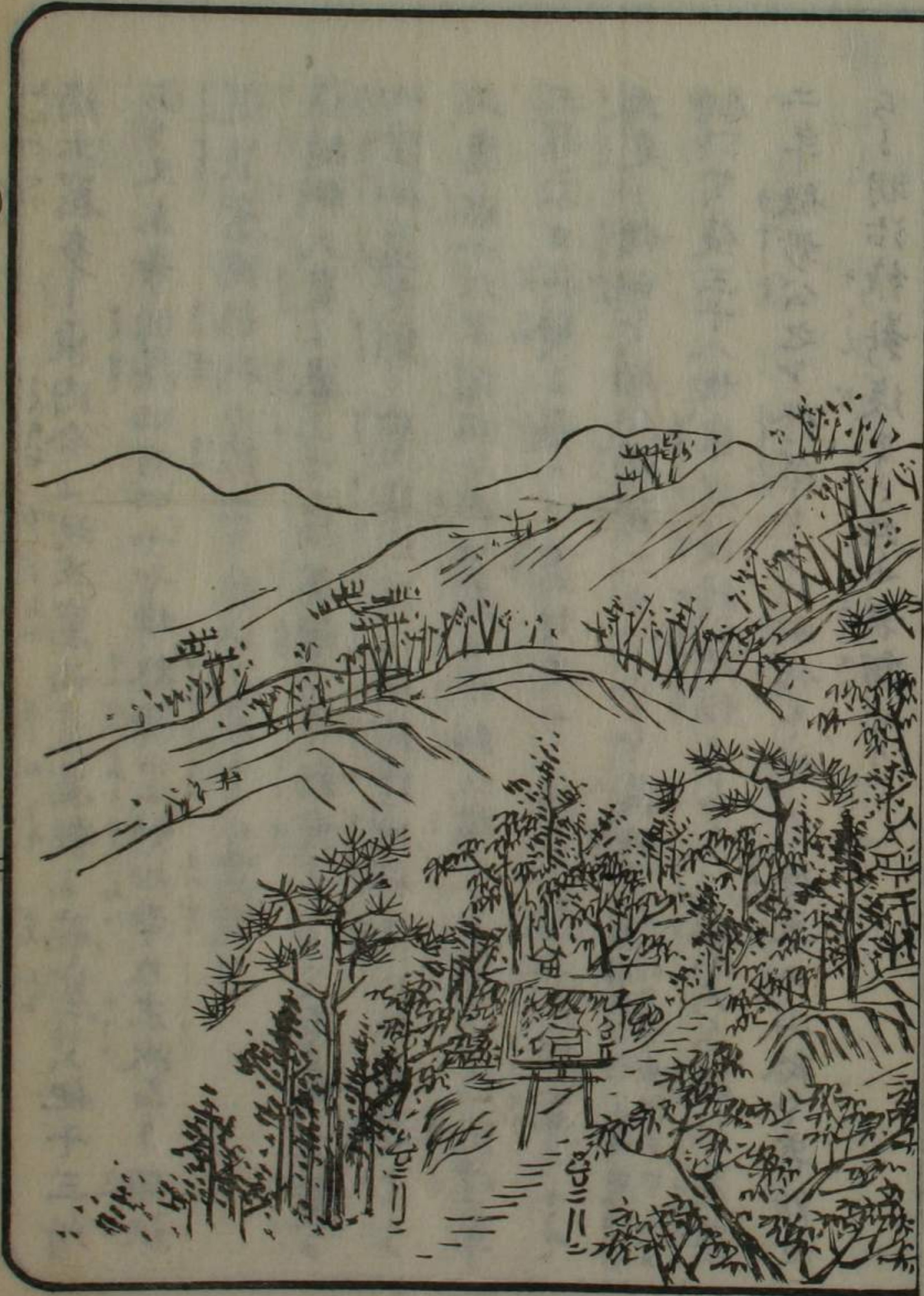
一望し風景殊に霏々西山の山麓ハ松楓繁茂して谿間を



埋み八景の一ふ数つ紅葉の称あり山腹小坂神社あり  
 社地二千六十三坪余饒速日命を祭り経津主命武甕槌命  
 天兒屋根命比咩大神を合祀す山上町等外千三百八十戸の産  
 土神あり養老元年四月創建し神田神社と号し延喜式加賀郡神田神社  
 是れ神護景雲二年以後神田神社春日大明神と改め又山上  
 春日社と改稱す後兵燹より廢り社殿盡焼失次寛文十六  
 年微妙公之を再興せし春日神社と稱し明治六年六月郷  
 社に列せられ七年六月今の号に改む境内富士社木花咲屋比咩神を  
あまの天曆年間創  
 建菅原社菅原道直公を奉る本朝二十五番鳴瀧社素盞鳴を箇霧神と  
あまの創建年代詳あ  
 あり又社邊に飛泉あり鳴波瀧と号し今僅に細水を通す  
 相傳ふ往時源義經北陸を微行し此所を過ぎて神社小憩ふ時

小辨慶携る所の螺貝は瀧の水を汲み鳴波瀧水の奔曲を奏せ  
 りし側の鳴瀧社の稱も皆是れ自由なり  
 傳燈寺の窟室 城東二里許河北郡小金村字傳燈寺地内傳燈  
 寺の境内にあり寺後寶龜山に祖師の墳あり其側は窟あり俗  
 之を探貝窟と稱す穴口漸々縮んでの窟中赤土より  
 開闢暗黒あり燈を點して行くべし六間余あり窟左右  
 は多し尤もこの窟状を考すもの數區あり其度凡三坪或四五  
 坪許皆小穴を繋りて入り又右のほ小池あり水面凡三坪許水  
 清潔より常減むることあり池中及び深詳あらざるが故涉  
 ることを得ず窟深きこと數町とす墳造の年代初くは相傳ふ  
 往時富樫氏の一族此に潜匿せし古墳ありとも詳ふは寺乃近邊





春日山紅葉  
並  
小坂神社



尚土窟多し東内合ふ坊主窟西荒屋敷に碗窟其他十三所  
 あり又本寺面積四百四十七坪臨濟宗妙心寺の末派あり開祖  
 運良當國初脚の際寶龜山地藏尊の靈驗を  
 後醍醐天皇よ奏上す後應曆二年勅宣よりて寶龜山の麓に  
 七堂伽藍を創し寶龜瑞應山傳燈護國禪寺の号を賜たり  
 又應永十六年開祖は佛林慧日禪師の益号を賜るなり延徳三年  
 三月二十日兵變に罹りて盡焼失せり後永正十二年勅宣よりて  
 再建し領田を賜ひ塔頭二十一ヶ寺を圍繞し後各地に轉し或は慶寺と  
あり今金沢市中に七ヶ  
 寺を其後三十八世宗祝没後無住とあり殿堂大に破れ兼應  
 二年微妙公之を修繕せり田領を増し従来の山林を寄附せ  
 らる明治維新後まゝ大に衰頽せり

醫王山

又育王山よ作る金城の東南に方り河北郡に居  
 す金城より頂上より凡五里許り八景の一として朝暾  
 の称あり高サ三百四十丈余山脈白山より来り加賀を前面  
 一帯に飛彈越中を脊後より多く薬草を産するを以て醫王  
 の名あり峰頂加越を一皆に臨む山中雜樹繁生し山湫多く  
 多し盛夏に深谷に雪を積む峰下は大湫あり大池と稱れ  
 後壁千仞一大石突出し池を覆ひ蒼んとするが如し其  
 状或の魚を窺ふに似たり之を鳶ヶ峯と云ふ峰上り矮松  
 多し偃盤して皆奇形あり往時山中寺院多く僧衆國司に  
 抗するを以て依久間盛政を燒亡せり

戸室山

醫王山の前よりあり高サ醫王山より亞ぐ山中多く



石材をきざり之を華鋼石とて其色青赤の二種あり堅硬  
ありと御影石と齋一文禄元年金澤城壘修築のとき  
許多の大石を引く小立野石引町の名ハ是れ小立野と云ふ  
猿丸社 城の東南に相距るは十六町余石川郡笠  
舞村の南方あり社地四百十坪祭神 神 神 神 神 神  
猿丸宮と唱ふ境角幽邃に杉櫛の老樹多し祠傍猿  
丸宮の草字ハ小野篁の真筆ありとて有名あり然るに笠  
舞の地を屏川よ流りて水田連り秋螢殊に群衆一人  
多く暮涼を逐ひ夜螢を撲る故ハ八景の一と数つて群螢の名  
あり  
貧人小屋 笠舞村の側ふあり一が今存せし寛永十年六

月松雲公此地に救恤所を造り封内の窮民を救養して業  
を授けらる之を貧人小屋と命ず當時に仁惠は感して之  
より之を御小屋と唱ふ 又同年八月より封内九十歳以上の民 天保  
年間凶甚の際窮民此小屋ふありもの四千八百五十九人の  
多きよ達し嘉永年間より漸く漸く七百人減せり舊主  
累世の仁政是を以て推測するに足り明治維新乃後  
終に廢絶せり  
蓮花瀧 城南一里三十町余石川郡蓮花村の東南字蓮  
花町より高十八丈幅一間三尺長坂渠の分流より屏川  
蓮花瀧より流る白練断崖より響き遠雷の如く其長  
坂用水ハ同郡小原村の北方字大淵割岩より内川の水を





十一



猿丸社

下



引き—そのあり

野田山

城南を相距る三十四町七間野田村の南方より三方山の峽先あり周圍凡一里余松樹森林々々数十町小互る字六ツあり九原。饑餓山北殿六尾。松區。雀谷とて官林墓地に属す東を舊墓地西を新墓地とて寔墓地は前田家歴世の塋所新墓地は金澤管所兵士の墳地ありとの他金澤士民の墳墓無量々々蘭煙常は荒草を繞る中間に登路一條あり村より高德公の塋はありやで九町二十三間あり封土の高五間周圍四十八間余上は榊松を栽り塋北

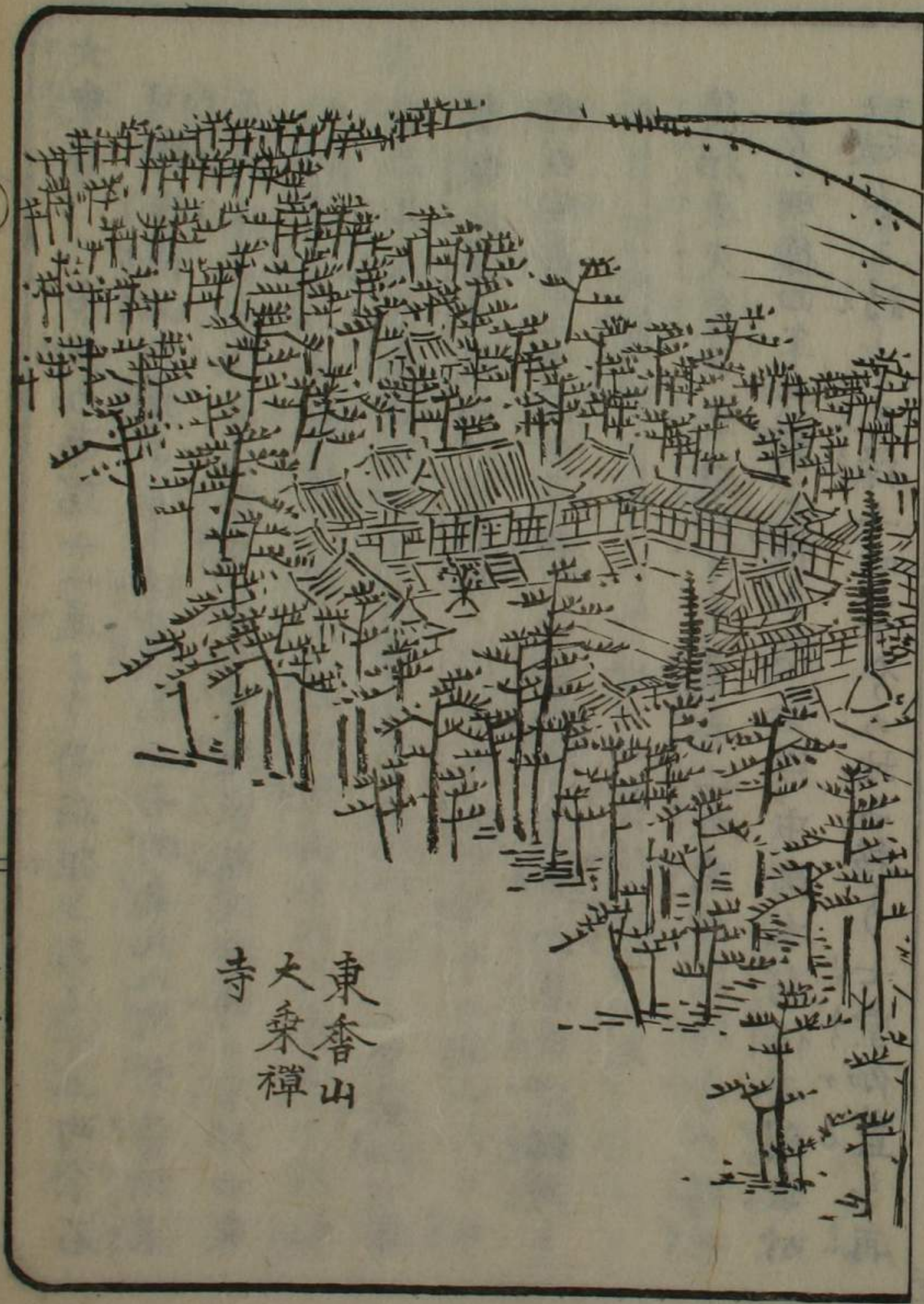
高德公塋

野田山の絶頂より

舊藩祖前田利家公の塋

方小面一木柵を繞らす公ハ尾張國荒子城主前田利春公の四男あり天文七年十二月廿五日荒子に生れ十四歳初て織田信長に仕へ弘治二年歳十九尾張稻生の役初て戦功を立て永禄元龜天正の間屬武功あり天正十三年十一月左近衛權少將に任じ筑前守を兼らる同十八年八月從四位上叙し左近衛中將に任ぜられ同十九年三月參議從三位叙し文禄三年四月權中納言に任ぜられ翌年二月從二位叙し大納言に任じ華族に准せらる同四年三月三日歳六十二大阪小薨せし詔して從一位を贈り湯高徳院殿前亞相贈一位桃雲淨見大居士と謚す遺命より此地に葬る前田家累世の墳墓は傍に多し





東香山  
大乘禪  
寺





大乗寺 市街の南端十一屋より南相距る處と十五町余石川郡寺地山の麓あり境内東西七町南北八町余曹洞宗永平寺の末派あり弘長三年富樫家尚同郡野々市村の東北寺跡多字外ふ創建し真言宗僧澄海を以て寺主とし弘安六年永平寺三世徹通ふ禪を之を開山とし二世瑩山ハ能登總持寺の開山三世明峰ハ越中氷見光禪寺の開山たり中興の開基ハ二十六世月舟とい寛應二年足利尊氏祈願所とあり十一代義植よりありて母の妻附伏あり又後柏原天皇の勅願所として東香山大乗護國禪寺の賜号あり明徳四年兵燹より罹り後金澤市街木新保又關原の大乗寺に移り元禄十四年今の地に移り七堂伽藍を再

建す傳來の什寶許多あり中み永平寺開山美陽大師渡宋の際書寫したる碧巖録ハ殊著名あり祖堂の冽井白山水もまた有名あり境内は前田家忠臣高田善藏本多家義臣十二士の墳あり寺ハ八景の一として晚鐘の称あり境外と船底山ともいふ松林苔滑として眺望閑豁あり市人遊山の勝地とあり  
藤五郎松 城南一里余を距り石川郡山科村の東南山麓に在り封土あり巨松一株あり圍二丈四尺高七丈八尺許背蒼々として孤立せり芋堀藤五郎墓あり一の松といひ又藤五郎薬師弥陀の二像を本村に安置す今野田寺町伏見即ちその堂跡に植る古樹ありともいふ又一説ハ藤五郎居邸の遺木

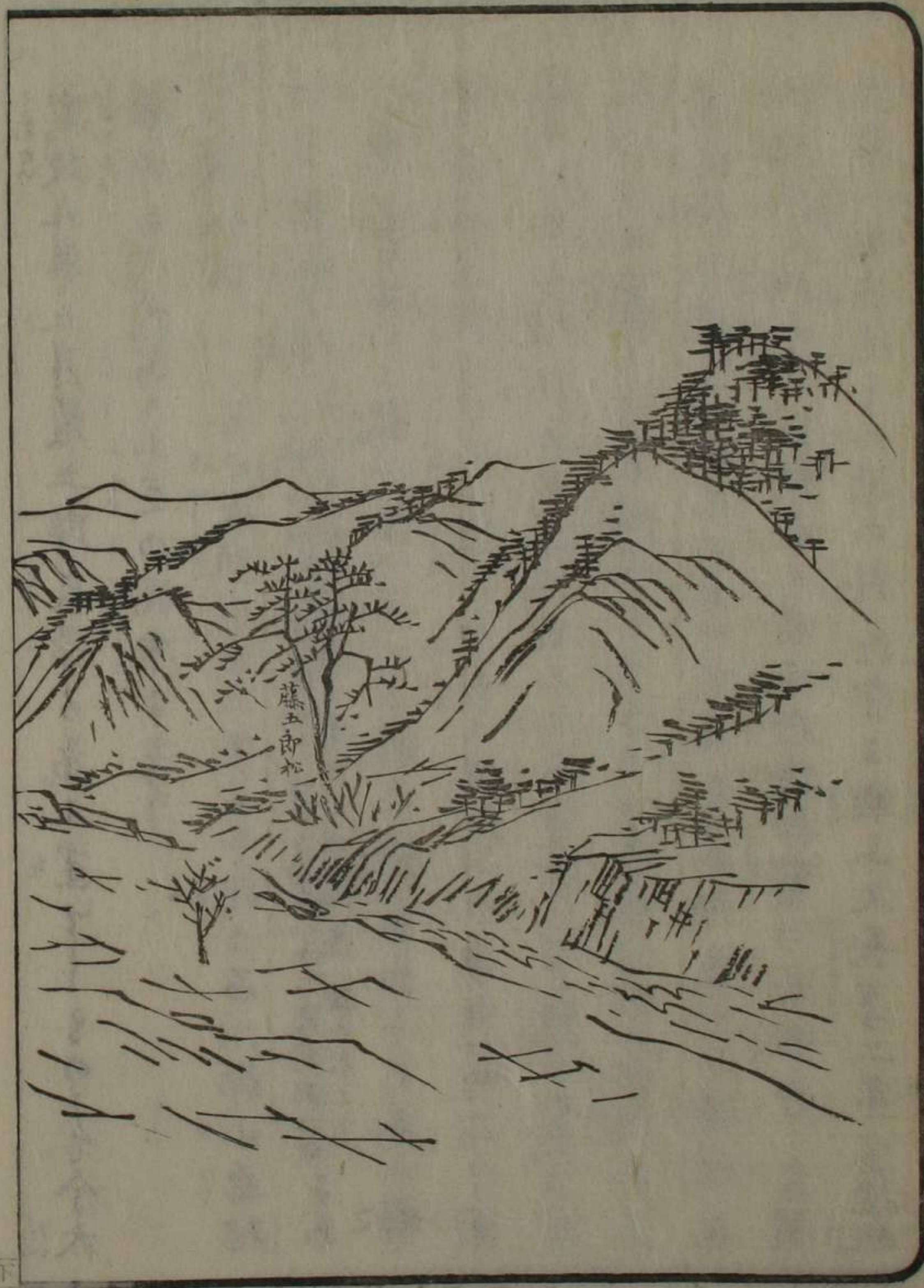


ありともいり後五郎ハ其年代及び誰の子たるを詳しせず  
一説ハ將軍足利仁の末裔とも蓋本村の農夫あるがごとく人となり法庵  
又義氏の第五郎ともいり寡欲家ハ四壁あり常ニ菓茶をわけて生計をたれ又郷人を  
恵むを以て樂とあせり世人呼て芋堀者五郎といり其妻女ハ  
山城國宇治郡山科の郷士生玉信方の娘とて名を和子又和  
子といふ能く夫は仕立一日信方より沙金を包を賜る後  
五郎之を腰に懸て山に往き之を雁に擲らるる和子怪  
みて其故を問ふ曰くこの物我常ニ薯蕷を掘る地多し  
何を惜みよと云ふと明日沙金多を得て之を澤に金  
城靈澤に流して歸りみづより一掬を蓄へ候はらるる散りて  
窮民は此に近郷の人教慕せざるは又二子塚ハ

寛政九年五月後五郎夫婦の爲に建てしものなり今大  
乗寺の門前ある山足圍中なる  
冠ヶ嶽城墟 一名小原城城南二里余を距る石川郡小原村  
の東南冠ヶ嶽 一名兜山往昔蓬草山と云ふ言百八十二丈周回二里はあ  
り東ハ葦谷川に接し西ハ内川に臨み断崖數千尺南ハ群  
峰起伏し池三方山に連る中間小塚あり東西一町三十間  
南北二町其坤方より二十間の小丘ありて其巔ハ四間ハ十  
五間の平甚あり蓋峰嶺を置きし多といふ南ハ館趾あり  
字保佐良志といふ東西五十間南北八十間東北ハ壞濠甚  
他城戸の址あり富樫氏の與力狩野伊賀の居城あり文明  
六年一向宗徒と小原の龍藏寺は戦ふ又長享二年富樫政



藤五郎松  
二子塚





親高雄落城の後姑此城小匿<sup>かく</sup>々々々後宗徒<sup>しゅうと</sup>下<sup>よ</sup>授<sup>よ</sup>ら  
是<sup>こゝ</sup>天<sup>てん</sup>正<sup>せい</sup>八<sup>はち</sup>年<sup>ねん</sup>紫<sup>むらさき</sup>田<sup>た</sup>勝<sup>かつ</sup>家<sup>け</sup>之<sup>の</sup>を<sup>を</sup>援<sup>たす</sup>け<sup>り</sup>

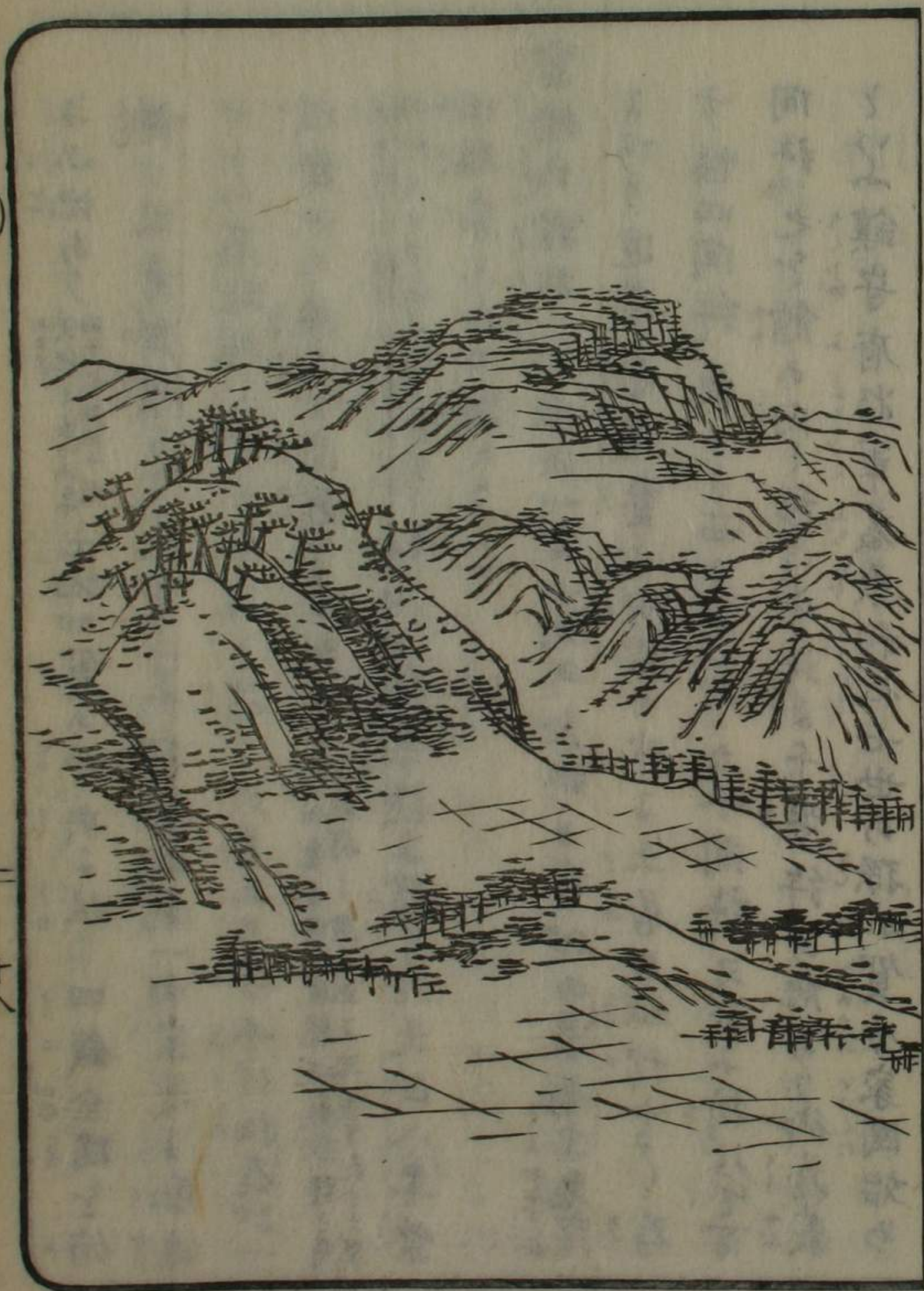
高雄城墟 一名富樫城といふ城南一里十四町石川郡富樫  
村字高尾の東南山頭<sup>さんとう</sup>あり今僅<sup>まじ</sup>に墨塹<sup>すみざん</sup>の趾<sup>すぢ</sup>を存<sup>ぞん</sup>じ<sup>て</sup>高  
百五十間許<sup>や</sup>稍<sup>しやう</sup>平坦<sup>へいたん</sup>々々々衰<sup>ふさ</sup>百余間幅<sup>ふち</sup>二十間乃至<sup>なほ</sup>十間  
四方の址<sup>あて</sup>あり墟<sup>きよ</sup>の西南<sup>せいなん</sup>又<sup>また</sup>一區<sup>いっく</sup>の平地<sup>へいち</sup>あり山前<sup>さんぜん</sup>八宮尾額<sup>はつみやご</sup>  
谷<sup>たに</sup>小通<sup>こつう</sup>下<sup>げ</sup>後<sup>ご</sup>ハ坪野<sup>つねの</sup>小通<sup>こつう</sup>ハ三面峻峻<sup>さんめんしんしん</sup>々々々西北<sup>せいぼ</sup>ハ田野<sup>でんや</sup>小面<sup>せうめん</sup>  
一鶴来<sup>つるぎみち</sup>迄<sup>いた</sup>ハ富樫氏累世<sup>りよかせい</sup>也<sup>なり</sup>市<sup>いち</sup>小居<sup>せうき</sup>り此<sup>こゝ</sup>小城<sup>せうじやう</sup>きて有<sup>あ</sup>  
事の備<sup>そまへ</sup>とあせり往<sup>むか</sup>時源義経<sup>みよもとよしのり</sup>奥州<sup>おくしゅう</sup>微行<sup>びぎやう</sup>の時<sup>とき</sup>白山<sup>しろやま</sup>神社<sup>じんじや</sup>小  
信<sup>のぶ</sup>り<sup>り</sup>比<sup>ひ</sup>新<sup>しん</sup>を過<sup>か</sup>り辨慶<sup>べんけい</sup>を々々々富樫城<sup>とがしじやう</sup>を窺<sup>うかが</sup>ひ<sup>ひ</sup>々々々又  
興國<sup>きこく</sup>六年<sup>ろくにん</sup>足利高経<sup>あしひたかてい</sup>軍敗<sup>ぐんぱい</sup>れ逃<sup>のが</sup>れ<sup>れ</sup>々々々此<sup>こゝ</sup>城<sup>じやう</sup>ハ據<sup>よ</sup>り<sup>り</sup>長享<sup>ちやうきやう</sup>

二年富樫政親一向宗徒<sup>しやうしゆんしやう</sup>下<sup>よ</sup>市<sup>いち</sup>の館<sup>くわん</sup>を攻<sup>せ</sup>ら<sup>せ</sup>て敗<sup>ま</sup>れ<sup>り</sup>本  
城<sup>たもと</sup>を保<sup>たも</sup>ち六月五日<sup>ろくにんごにち</sup>賊<sup>ぞく</sup>の火攻<sup>くわこう</sup>小<sup>せう</sup>城<sup>じやう</sup>陥<sup>か</sup>つ

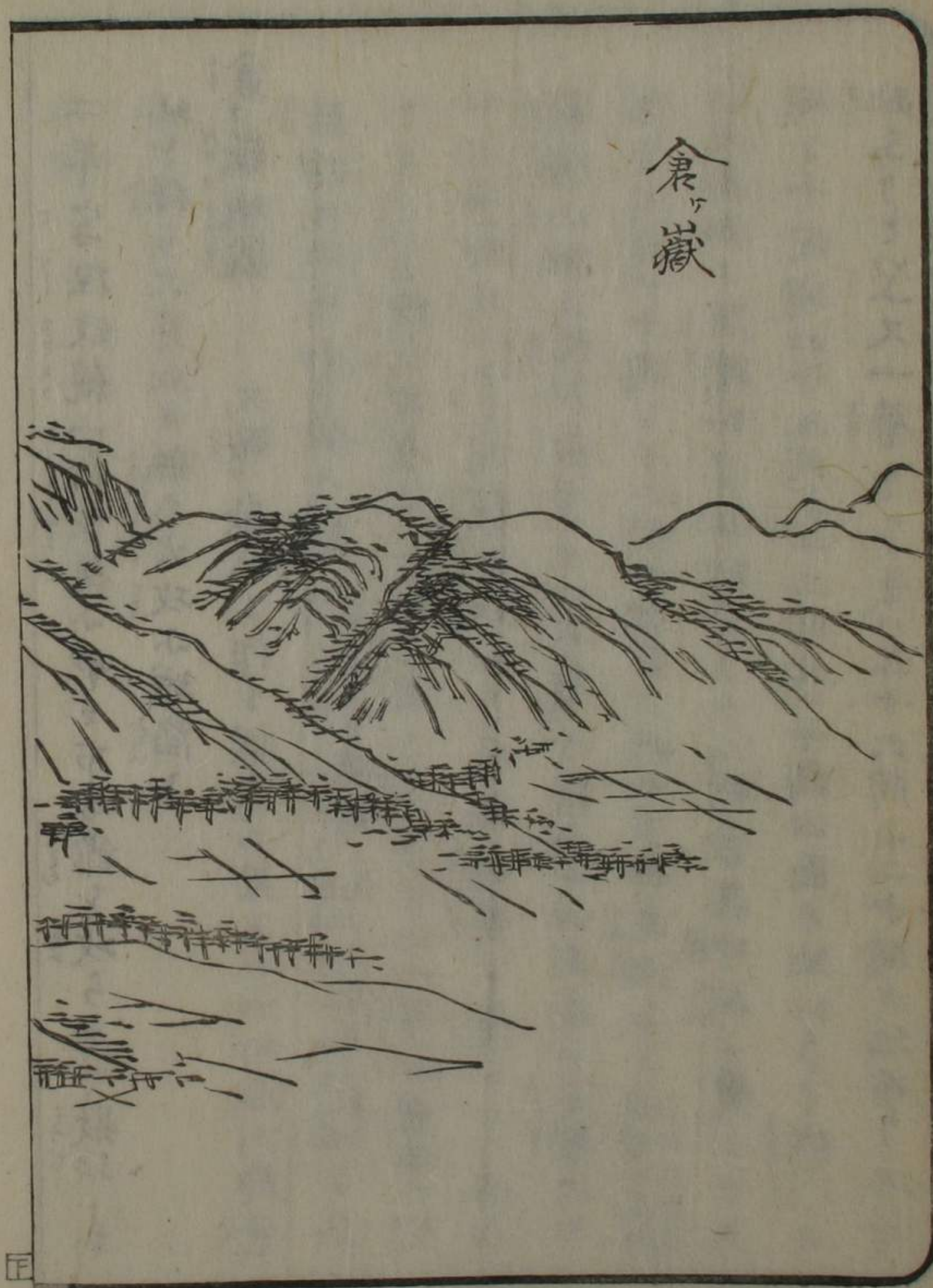
倉ヶ嶽城墟 又鞍ヶ嶽城<sup>くらがたけじやう</sup>ハ作<sup>つく</sup>る城南<sup>城南</sup>二里三十四町石川郡倉<sup>くら</sup>

嶽<sup>たけ</sup>村<sup>むら</sup>の西南<sup>せいなん</sup>倉<sup>くら</sup>嶽<sup>たけ</sup>の巔<sup>しん</sup> 高<sup>たか</sup>千八百二十三尺周回<sup>しゆかい</sup>二十七町十八間ハ在<sup>あ</sup> 山脈<sup>さんみやく</sup>南<sup>なん</sup>大<sup>だい</sup>見<sup>み</sup>霧<sup>きり</sup>嶺<sup>りやう</sup>ハ連<sup>つ</sup>り<sup>り</sup>て数<sup>かず</sup>里<sup>り</sup>ハ互<sup>たが</sup>ひ<sup>ひ</sup>在<sup>あ</sup>  
りま<sup>ま</sup>富樫氏<sup>とがしぢ</sup>有事<sup>うじ</sup>のた<sup>た</sup>ふ<sup>ふ</sup>葉<sup>は</sup>き<sup>き</sup>々々々<sup>々々々</sup>城<sup>じやう</sup>趾<sup>すぢ</sup>東西<sup>とうせい</sup>一<sup>いっ</sup>町<sup>ちやう</sup>  
十五間南北<sup>なんぼく</sup>二十二間稍<sup>しやう</sup>平坦<sup>へいたん</sup>あり東南<sup>とうなん</sup>絶壁<sup>ぜつぺき</sup>を繞<sup>ま</sup>ら<sup>り</sup>々々々西北<sup>せいぼ</sup>  
断崖<sup>だんがい</sup>山<sup>さん</sup>湫<sup>しゆう</sup>小<sup>せう</sup>臨<sup>りん</sup>む最<sup>さい</sup>高<sup>たか</sup>の一<sup>いっ</sup>丘<sup>きやう</sup>廣<sup>ひろ</sup>十間小<sup>せう</sup>十四間南<sup>なん</sup>の石<sup>いし</sup>磴<sup>だん</sup>四十  
間を下<sup>くだ</sup>ハバ十間小<sup>せう</sup>十二間の地<sup>ち</sup>あり此<sup>こゝ</sup>の下<sup>した</sup>ハ大<sup>おほ</sup>池<sup>いけ</sup>あり 後<sup>ご</sup>百五間深<sup>ふか</sup> 六十二間深<sup>ふか</sup>  
又<sup>また</sup>東<sup>とう</sup>ハ小<sup>せう</sup>阪<sup>はん</sup>磴<sup>だん</sup>あり本<sup>ほん</sup>村<sup>むら</sup>より十二町余<sup>じふにちやうあ</sup>其中<sup>ちゆうちゆう</sup>間<sup>かん</sup>ハ廣<sup>ひろ</sup>二十五  
間小<sup>せう</sup>十間或<sup>ある</sup>四十五間小<sup>せう</sup>十三間又<sup>また</sup>八十間四面<sup>しやうめん</sup>の地<sup>ち</sup>あり々々々城<sup>じやう</sup>門<sup>もん</sup>の  
趾<sup>あて</sup>ありと<sup>と</sup>又<sup>また</sup>一<sup>いっ</sup>層<sup>そう</sup>を下<sup>くだ</sup>ハバ三十六間小<sup>せう</sup>二十間の地<sup>ち</sup>あり此<sup>こゝ</sup>所<sup>ところ</sup>





倉嶽





小池あり天池ともいふ土地加賀の中央に位し四顧全國を俯  
親し風景佳絶あり長享二年富樫政親一向宗徒に馳迫  
せられ高雄城を棄て本城に據り六月五日子千代松及び一  
族數十人諸共防戦して死せり富田景周曰く政親水巻忠頼と馬  
上相搏し俱に池に沈みて死す里  
談あり信ずるは是らならず又一説は後宗徒に據られ天正八年柴  
田勝家ありを拔り

富樫氏館跡 城西一里十九町余野々市村の東南字鬼窪  
より近年悉開墾し田圃の中は土居の址稍存く存  
す幅四間許、東より西は互りて五十間許、又北は折れり百  
間許之を館の内と稱し其北は千歩許の地あり御花藪  
といふ鎮守府將軍後原利仁七世の孫加賀介家國始め

て館を築き世々あり居り富樫氏八利仁の二子次郎始  
めて姓を起しあり平家物語義経記に富樫館と稱し  
る、即是れあり此地歎く感きものありといふも古跡乃  
著きその名は此に掲ぐ

道今古塚 俗尾丸塚と稱ぶ城西一里二十町北笹塚村の  
地あり土を封じ塚と稱し高四間周匝四十間上は松  
樹多し今古の本國大野郷珍石川郡の人あり父は誰たる  
を知らず母は箭集清河の子あり今古十三歳より  
て加賀權様大神高名に嫁し二十餘年を経て夫高名  
死せり思慕の餘遂に其塚南笹塚村にあり  
俗尾丸塚と稱すの側小廬を結  
び數年日夜哭泣の聲絶えぬ仁和元年十二月九日位二階



を授け田租を免し貞節の旗を門閭に表せらる

小立林 城西二十四町余北廣岡村の東北ふあり往時此地樹林連りて小立林と稱せし今平岡野神社あり

地樹林連りて小立林と稱せし今平岡野神社あり

と社地七百坪伊井丹尊大山咋神大國主神を祭り創

建年代詳あり或云延喜年中に創し大山咋神を祭りもと平岡

山王社と稱し真言宗顯澄院別當たり明治二年日吉社

と稱し神職を改め七年六月今の号を改む境内古松一樹あり

周一丈五尺余壽永二年四月平氏の大軍越前より加賀へ入

り進んで越中般若野に陣す本曾義仲之を聞き兵五万

を師の越後を發し越中へ入り埴生に陣す五月十一日夜義

仲奇計を以て平軍を俱利伽羅山に破る平軍死傷無算

積屍山谷を填む平軍退りてかか宮腰鈴の旗を樹て敗

卒を集む義仲進んで此地に陣し平軍義仲来り怒るん

こて伐りてまゝ大に敗走す林中一小祠あり義仲之を火

して跡を燭さんとせし即ち本社ありと云ふ又義仲の本營

ハ此地に據る長田村の東方より長田菅原神社の西

南梨畠の地ありと云ふ

河北湖 又蓮湖又大清湖の稱あり又湖西を粟崎湖と

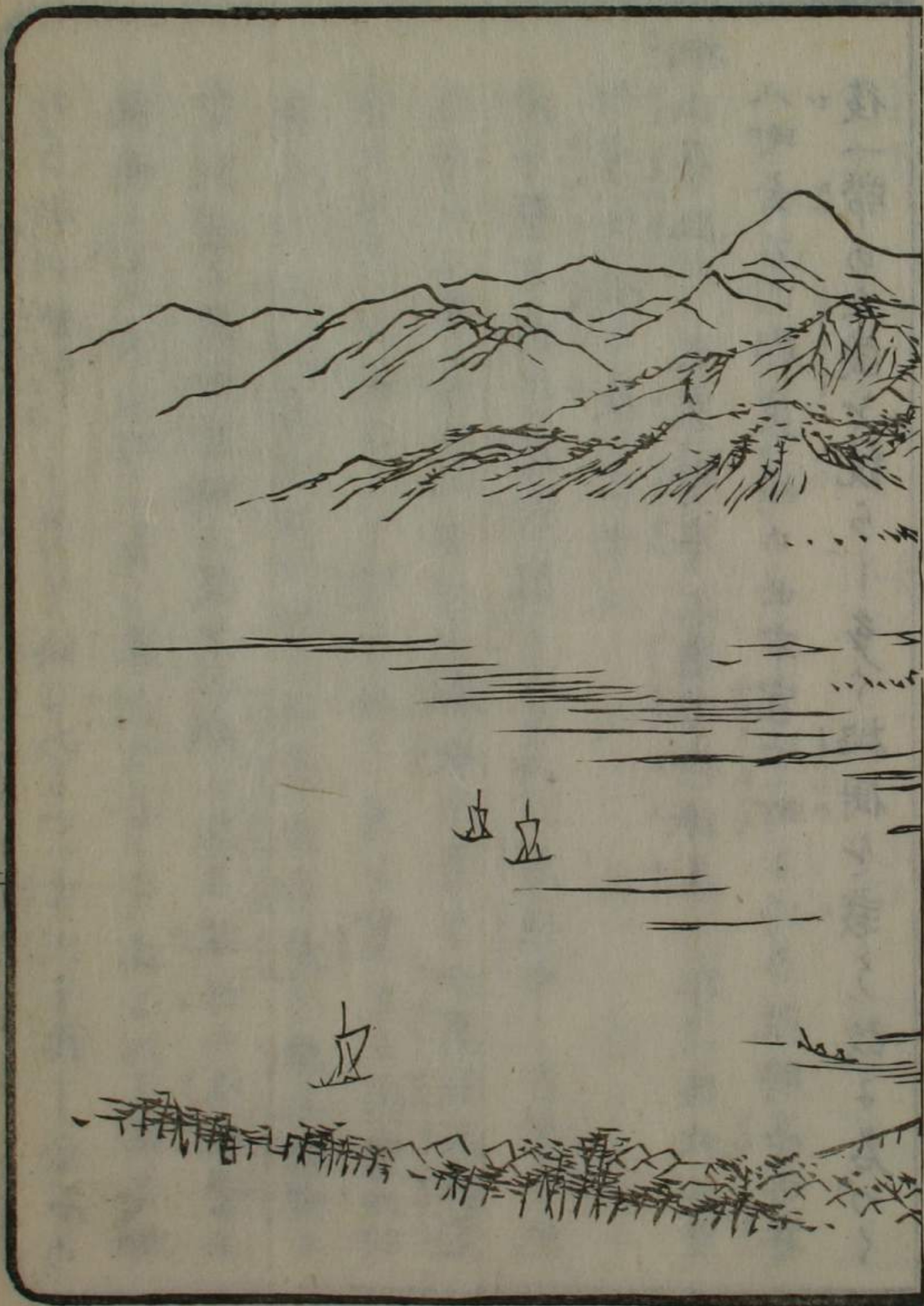
稱す城北二里許りふあり東北に河北郡西南に石川郡に属

す湖面東西二里十八町許り南北廣き八凡二十町狭き八二

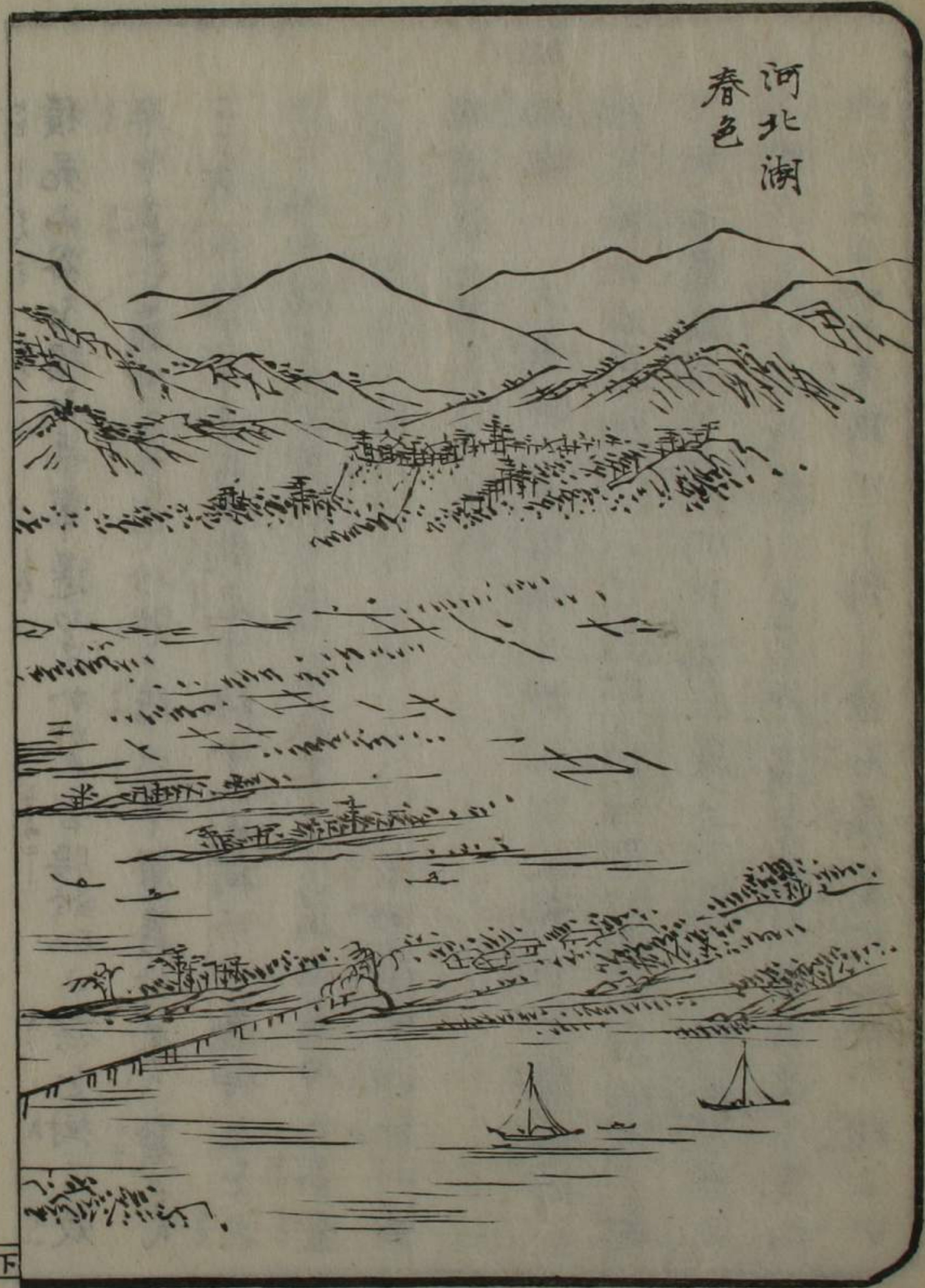
三町許り森下川淺野川名の流を容れ西北流して二

派とあり一ハ大野川と稱し金石茶釜町旧大野村の端より





河北湖  
春色





たり新川寛永三年とありて海よの一古川と稱す金石の  
 東南に沿ひ冬瓜町より犀川に合し海よ入る総て加  
 賀能登の荷物運輸の便を此湖に取風帆の往來常ふ  
 絶えずが満湖産魚湧ぐ如く兩岸漁舎連り獵船絡繹た  
 り又風景佳絶し晴を弄し月を賞する遊客四時  
 船を泛ぶ舊藩の時古川に船廠を造り小早船遊船敷  
 艘を繋ぎ船手足輕數十人を以て居住せしむる他  
 を字御船小屋といふ

桃山亭趾 又粟崎亭又通俗御旅屋と稱し城北二里  
 八町余石川郡粟崎の西方宮下町より往時亭の脊  
 後一帯の丘陵を繞り多く桃樹を栽り故に名づく

寛文九年松雲公此の水亭を造り政務之餘暇娛樂の處  
 とせしれ屢文雅の會あり後前田家歴代遊覽所とせしる  
 蓋亭の構造八十坪余外圍千八百八十四間余松を列植す  
 明治八年亭を廢す遺地今栗園と爲れ一説は天正十  
 二年豊臣秀吉越中征討の時此地に遊獵して絶糸を  
 を賞し小亭を建りて結構種々の名木珍品を用ひ彫  
 美を盡せりとす

小濱神社 金城の西北一里二十八町余石川郡五郎嶋村の  
 東北より社地二千百十八坪大己貴命を奉り少彦名  
 命事代主命を合祀す延喜式内の社ありとて河北郡  
 小濱の磯崎にあり養老二年六月十八日磯崎より三十

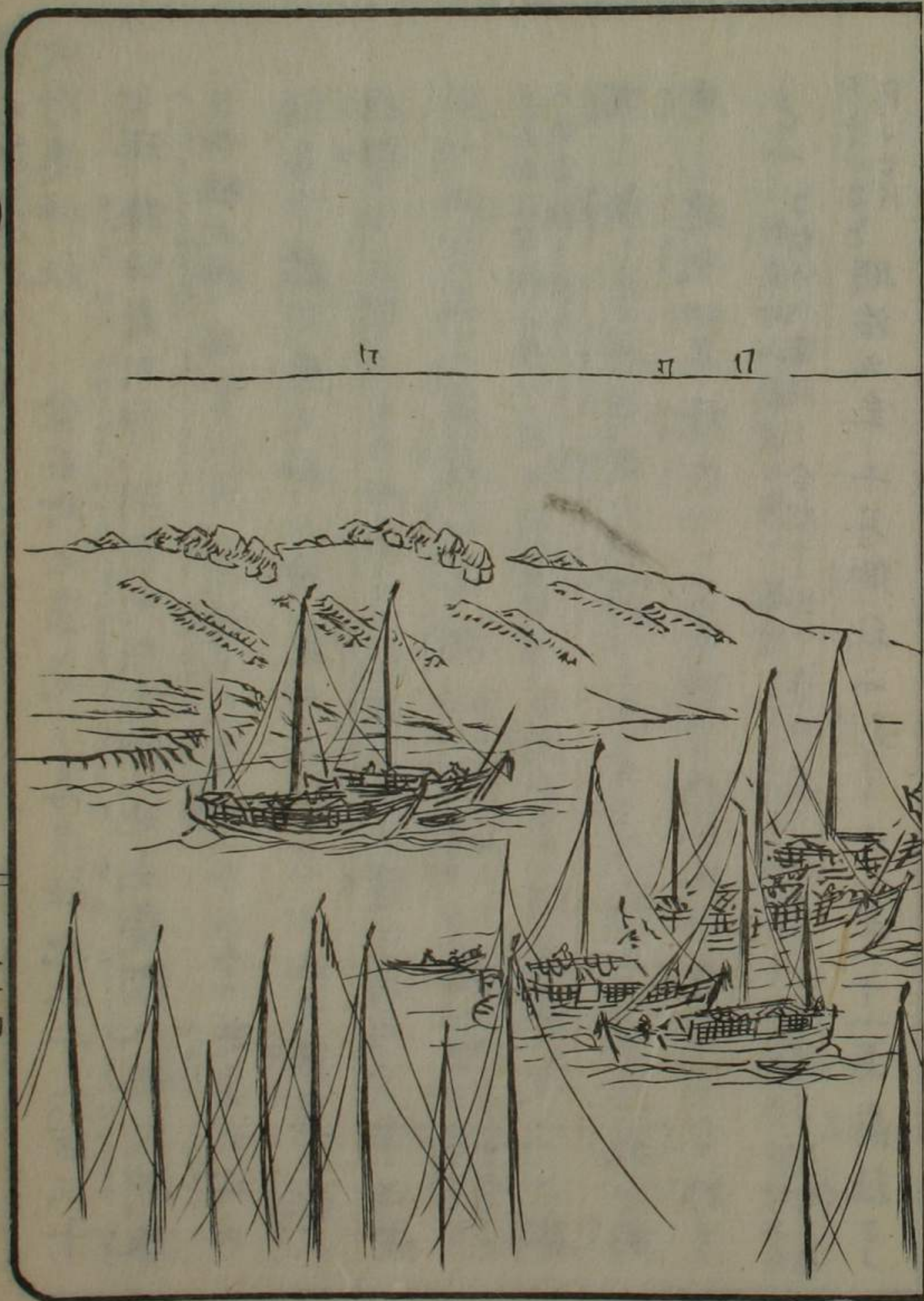


町余南小濱の松林今河北郡宮坂村の西海岸字黒津舟おねに於て正徳四年  
海岸崩潰せしを以て神殿を境内の東方に移し寛政十  
一年地震の爲に祠殿等悉く破壊す天保三年今の地  
に再建す明治五年十一月郷社に列し十三年縣社に列せ  
らる境内に磯前神社あり天照大神あまてらすひかりのみかみ豊受媛神とよけひめのみかみを祀る此地  
河北湖に面し松林蒼々として數町に亘り風色とものぶる  
藤一八景の一ふあつて夜雨の称あり

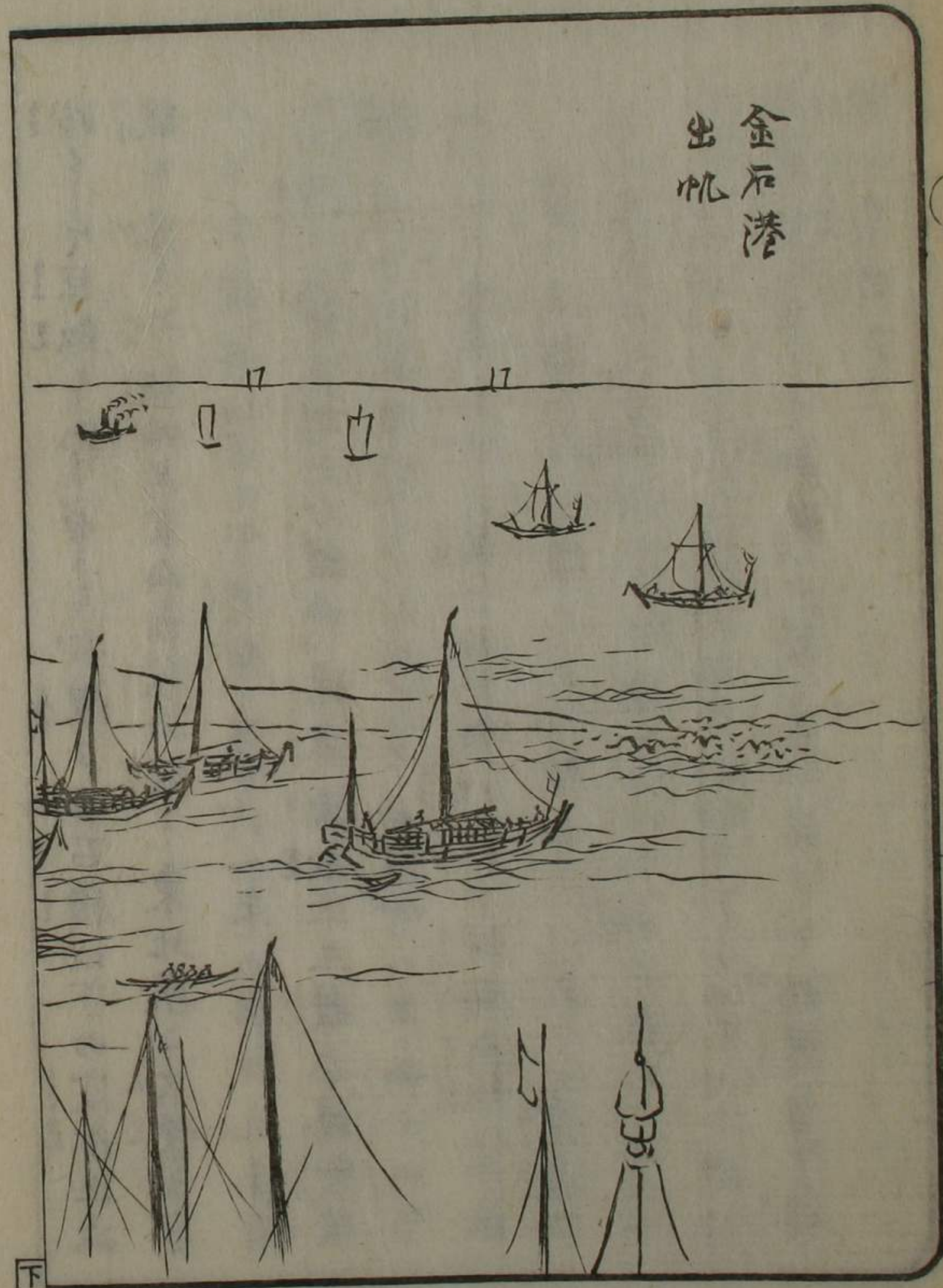
金石港 金澤の西北二里二町余金石町ふあり本町庄町  
の二口あり本町口の犀川の下流冬瓜川とありて海に  
つり居町口の河北湖の下流新川とありて海にひる昔は西  
方に向ふ暗礁出洲あり船風波を避くべしといふも海底

舟と巨船を入るる船は僅に百石積以下の空船五六  
艘を容る干潮四尺余西南風ふ宜く東北風は不便あり  
冬十月より明年四月まで運漕通せば一年の出船凡三百  
二十艘入船凡九百六十艘許り近年漁船二三艘本港敦賀  
港の間を定期往復するに至り金石町は東西十五町  
南北六町東南田野に連り西北海に面し沿海大約三十余  
町一帯の沙漠あり金澤の通路東南より来りて道敷四  
間三尺左右松の列樹あり町敷四十一本籍戸數凡二千二百  
余人口凡九千七百余日本形船千石以下大小四百七十艘許り  
荷車大小百七十輛許り三月より十月まで漁獲多く終  
歳民業餘あり





金石港  
出帆





大野湊神社

金石町の東南に在り社地二千六百三十

七坪猿田彦大神。別宮天照大神。地主護國八幡大神。春

日四柱大神。西宮大神。荒魂大已貴命を祀り延喜式内の

社あり猿田彦大神ハ神龜四年六月十五日陸奥の住人

佐那と云ひ一もの此沖を航海中ニ獲ておれを今の金

石の西方あり真砂山竿林古時今の本町の西海濱宇日和山より西に在る砂山あり頂上樹木繁茂す之

を真砂山竿林と稱す源平盛衰記す小祠あり明年神孫之を奏

聞一勅一々佐那武大明神と号せしる天平元年社殿を創

建一建長四年焼失せり當時今の社地寺中宮ニ合祀す

と云一説真砂山暴波の爲ニ崩壊せしを以て寛永十五年寺中村小

野中村を移し合祀す因て寺中宮と移すと社地今本町ニ在

明治五年十月郷社ニ列一十二年十一月縣社

列せり三社の末社武猛社ハ五十猛命御食津社ハ宇

迦之御魂神三熊社ハ三熊大人を祀りもと境内ふりりガ

今假ニ本社ニ合祀す境内加武劔社ハ素盞鳴尊を祀り

白山社ハ伊弉諾尊。菊理姫命。伊弉冉尊を祀り少彦名

命。菅原道真公を相殿とす又毎歳五月十五日の祭日ハ

舊藩主累世能舞狂言を執行一近郷の系觀人群集一

てまじふ盛あり一を以て今猶有志者其奉を繼續して

意事一を存せり



附録

白山略記

白山しらやま 一名越白根こしのしらね 又白嶺しらね 作能美郡の東南隅がうにありて金澤元標もとへし尾張町おひさかちより大汝峯おほにきみねに至るまで里程尾添村おしぞを經ふれば二十里許ちふり、白峰村しらみねを經ふれば二十二里三十町許ちふり、東ハ飛彈ひだ西南ハ越前えちぜんに跨またる白山ハ關山せきざんの總稱そうしやうとして山中著いちやくきもの五峯ごぼうあり北の三峰さんぼうを御前みまへ大汝おほにき、劔峰けんぼうと稱なづけ三峰さんぼう鼎足ていそくをなす南の二峰にぼうを別山べつざん、三峰さんぼうと稱なづけ其外そのほか四塚峰よつづかぼう、長峰ながぼう、油坂峯あぶらざかぼう、阿舍禮山あせれざん、又曝山あはらざん、大屏風おほびんぷう、釋迦嶽しやくぢやく、倉山くらざん、大目附谷峰おほめつけやぶぼう、或獨目谷またひとめやぶ又見鳴谷峰またみなるやぶぼう、打波峠うちはたが、赤兔山あかうさぎ、大長山おほななが、青柳峰あおやなぎのぼ、六萬部山ろくまんぶざん、加持山かぢざん、子持山こもちざん、大雪顏山おほゆきかほざん、山伏山やまふし、寺の



秀峰あり山脈御前より起りて南北越前飛彈の界は  
互り美濃郡上郡より北に加賀飛彈の國界とあり於  
走りて加賀越中の國界を畫せり四方餘勢のいたる  
計廣袤大約二十里周回凡六十里登路五條あり北  
方尾添村より廣野長峰瓶割坂を登りて上るを東  
路と云ふ四里三十町十六間三尺路險あり西方白峰村  
市瀬より椹坂豊坂別當坂弥陀原室平等を經て  
上るを南路と云ふ二里十五町四十四間三尺路稍夷  
り又市瀬より尾太郎椽猶木坂畜生谷梅坂等を經て  
別山より上る路あり二里三間三尺以上三條ハ能美郡に屬  
す又東方飛彈の平瀬村より御前より上る路あり南方

越前の石徹白村よりより別山を經て御前より上る路  
あり以上二條ハ共九里八町と云ふ室堂四ツ町り市瀬よ  
り登る間より慶松室堂ハ開山中堂守を置く氣候ハ  
寒暖甚差あり晴日ハ二十四五度授氏寒ふ上り雨を來  
せば忽十度乃至八九度下る寒暖の變一日夏冬と  
混じりて又白山ハ往時加賀に屬せしを天正八年  
柴田勝家越前北庄に封を受けしより以來越前の國  
主之を領し明暦元年尾添村の民地を争ひしより金  
澤藩尾添荒谷の二村を領せり寛永八年幕府争論を  
停め幕府領とあり爾來越前加賀白山麓と稱して  
郡名を稱せば明治維新之際官地理を檢査し明治



五年十一月十七日白山及び麓十八村を加賀能美郡に  
 組入れ石川縣の管轄に屬せり  
 御前 一名岾山と稱し關山の中央に位して最高く海  
 水を抜くまゝ八千六百八十一尺峰頂稍平坦す菊理媛  
 命の神祠あり越中立山ハ寅十二度四十五分飛彈鎗嶽  
 ハ卯一度十五分信濃御嶽山ハ辰十二度三十分義濃金花  
 山ハ辰二十八度ふりり  
 大汝 又御汝女路越南路大男知に作る俗奥院或内陣  
 と移り高八千六百十八尺峰頭平りし亦神祠あり  
 大已貴神を祀す御前ハ巳十四度三十分劔峯ハ辰二十  
 四度十一分ふりり

劔峰 一名劔御山又劔嶽と稱し御前より丑の五度四  
 十三分直徑五町三十七間余ふりり高八千五百九十  
 九尺五峰排列して状五劔を束ね立つるが如し  
 十二年峯南に火口を開き焦石望むべくし攀づるが如し  
 以上三峰総て石より成り上層砂礫を載り草木を  
 生ぜば多く硫黄を出る  
 別山 一名小白山と稱し御前の南直徑四十八町余ふ  
 あり高七千七百九十二尺飛彈に跨る大山祇神を祀  
 する石山より上層土を帯び稍五鍼松を生ず  
 三峰 別山の南直徑十七町ふりり高七千一尺強東南  
 越前飛彈に跨る松及び雜樹を生ず



白山比咩神社奥宮

境内東西三千七百八十間南北五

千三百六十間面積九百四十二万三千五百九十八坪神  
社ハ白山御前頂上ニ在リ祭日ハ毎歲二日あり七月十  
八日を開山祭九月一日を閉山祭とスト攝社大己貴神  
ハ大汝オホニヂニあり大山祇神社ハ別山ベツサンニあり養老元年僧泰ヤウロウ  
澄白山シヨウハクサンの峯ニ三社を置き白山禪頂妙理大権現シエンテイミョウリと号  
す又山麓サンロクの各地ニ社寺を創建クワンシ神田若干カミタニシクあり天長  
九年山脚サンキョクの三國サンクニニ神宮寺を建造ケンクウシ加賀ハ中宮寺ナカミヤジ越  
前ハ平泉寺ヘイセンジ美濃ハ長瀧寺チヤウリョウジと号ス中宮寺ハ本社ホンジの神  
宮寺ミヤジトシ白山を總轄ソウカツシ神祠祭祀シノミタマヒヲ掌ツカサリ來キリ  
カ天正八年テンシハチネン以來白山を越前エチノプリニ領リョウセシテシテ遂ツニ平泉寺

より總轄ソウカツスルニ至シテより明治五年白山を加賀カガニ領リョウシ本縣  
の管轄カンカツトスルリ七年三月石川郡三宮村國幣クニヒ小社白山  
比咩神社ヒメノミヤの本社ホンジトスルリ七月神佛混淆シノブツクワウ禁止キンジの令レイニより  
佛像ブツゾウヲ除ノケキ神鏡シノキヤウヲ遷ウツセリ十年本社ホンジの稱ナヲ改カメテ更  
小奥宮オホノミヤトスル

寶藏石 御前峰ミマエノミネの西北シホキニ方カタリ巨巖キョウガン突出トツシユス高タカ百三十尺

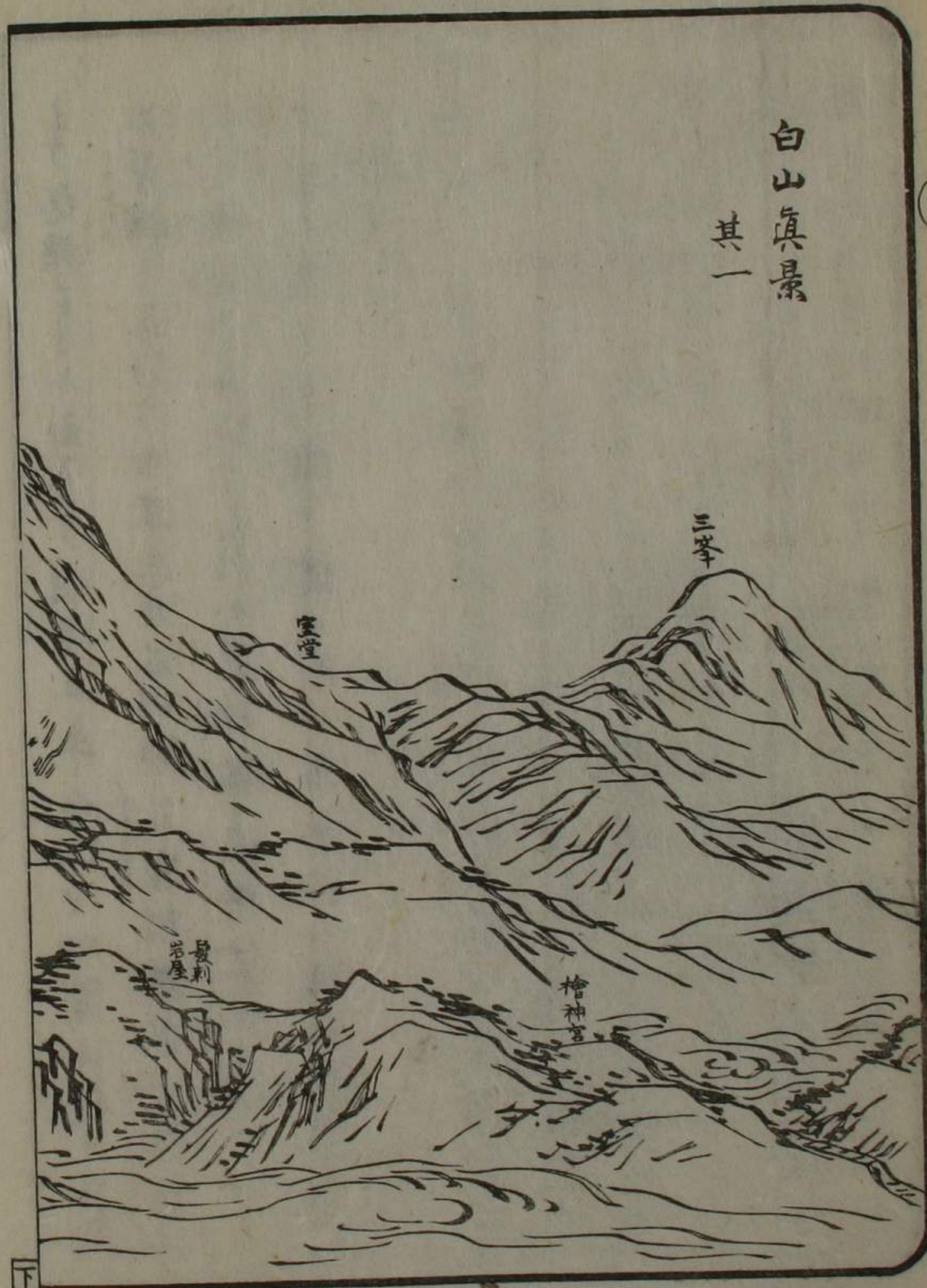
余閣ヨカク三百尺許ヨリ其狀シテ大廈オホウチの如ニシ半腹ハンブクニ窟クツ空洞クウクウあり  
テ之ノヲ旭洞アサノイロト稱ナセリガ元祿中ゲンロクチュウ硫黃リウウ噴出フンシュツシ洞穴クツ類ルレ今  
嵩石堆累カミイサミの狀シテあり曠輝クワンキ之ノ映エイトシは觀ミアリ

千歲谷 御前峯ミマエノミネの西ニニあり千古センコの積雪セキセツ平地ヘイチを有アリ  
數十丈ジュウシウの下ノニ水口ミヅグチあり龍尾リウビト号ナリ噴水瀑布フンスイポフウトスル

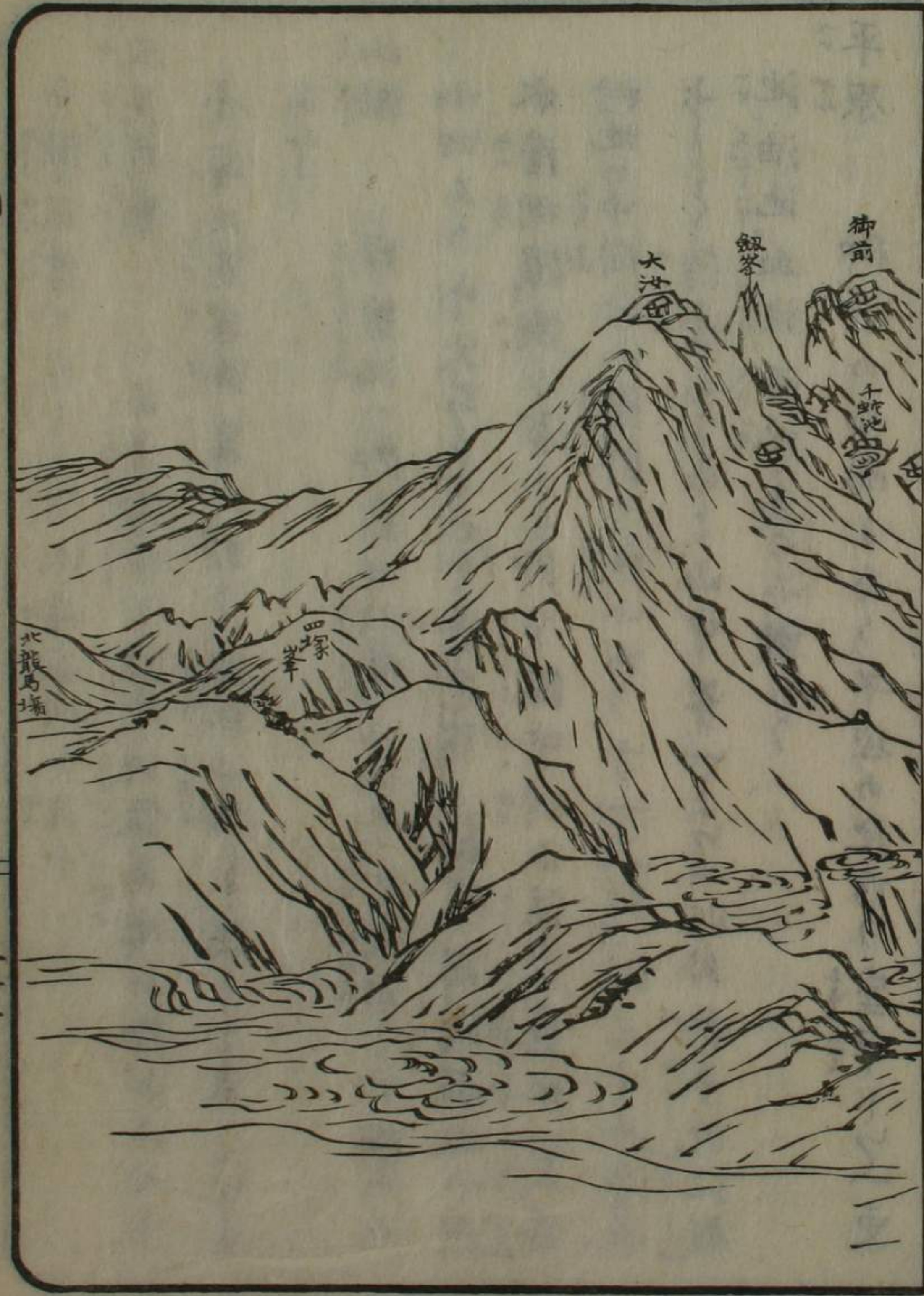




白山真景  
其一







其二





響風雷の轟く下流湯谷川に注ぐ  
三日月第 一名月輪波と称す北龍馬場の南方より  
千年の宿雪断崖小懸り通路山腰を繞りて半月形と

山湫 緑碧池ハ御前の北麓より千蛇池とも称す大

小四あり一々大なるものを普光院と稱す周圍百五十間  
水渚冽深測るるをくわび下流中川に注ぐ壺水の尾添  
村地の中間白山登路の側より方一尺許深三寸の湧泉  
あり清涼なるあり山中第一とす此外御手洗池殿  
池油池血池雨池等の小湫あり

平原 御前の西南より平坦の地あり室平といふ東

西四町南北三町次を彌陀原と号し東西八町南北五町  
其南の平原を南龍馬場といふ又大汝の西北より  
高原を北龍馬場と稱す平夷あり五町許あり此  
邊より山腹左右五鍼松を生じ鶴島多し又鏡峯の  
北方を護摩堂原といふ

溪水 北麓ハ溪間最深し其東あり中谷雄谷雌谷荒  
谷と稱す甘西ありを牛首谷と稱し中谷の溪水を中  
川と稱し緑碧池より發し北流して尾添川とあり湯谷  
ハ四塚峰に發し丸石川と稱す 川石圓形ありて能く雌谷  
ハ目附谷川荒谷ハ荒谷川と稱す並小四塚目附釋迦嶽  
小發し北流して尾添川に合す之を手取川の上流といふ又



西牛首谷の溪水數條ありて別山谷川ハ別山ヲ流レ一井谷川ハ  
 三峰ヲ流レ赤谷川ハ油坂峰ニ發シ柳谷川ハ御前の南ニ  
 發シ湯谷川ハ大汝の西ニ發シ宮谷川ハ釋迦嶽の西北ニ發  
 シ東又谷中又谷西又谷ハ並ニ越前連脈ニ發シ其他岩  
 山谷大杉谷等の溪水皆西より來リ合流シ牛首川トアリ  
 下流尾添川ニ會シテ手取川トアル東ハ大白水小白水合  
 流シテ飛彈ヲ入リ白川トアル南ハ石徹白川越前ニ發シテ  
 九頭龍川トアル  
 瀑布 雄谷の千仞瀧ハ高十五丈幅一丈八尺四塚より  
 來リ丸石川トアル雌谷の二重瀧ハ二層ニ落ツ各高十  
 丈幅一丈二尺四塚より來リ目附谷川トアル濱谷の千

手瀧ハ高十二丈幅一丈八尺千歳谷より來リ千手谷  
 の絶壁ニ懸リ湯谷川トアル柳谷の不動瀧ハ三層ニ  
 落リ高上六丈中五丈下四丈幅共一丈二尺万歳谷賽  
 河原山場谷の溪水合流シテあり柳谷川トアル別山  
 谷の龜瀧ハ二層ニ落リ言上層十八丈下層三十丈  
 共ニ幅二丈四尺尻滑谷の溪水ト合流シテ岩山谷川ニ  
 注グ赤谷の布引瀧ハ長三百丈許幅一丈六尺屏風小屏  
 風の溪水合流シ赤谷の岩壁を縁ヒ降りテ柳谷川ニ  
 注グ柳窪瀧ハ言一丈八尺幅一丈八尺牛首の西方山中  
 より發シ明谷川ニ注グ  
 奇石 手洗鉢石ハ大汝四塚の溪間より高七尺長一



丈八尺幅一丈二尺石上は徑二尺許りの凹あり中ふ水盡  
 まくし三石ハ牛首の東方岩山谷川の中は有り三つは分  
 る各高十五間横縁々四十間許り石上樹木叢生す立石  
 ハ牛首川の側字桑島ふあり長十間横八間石下より清  
 泉出づ平岩ハ字大杉谷口の牛首川はあり川中一面岩  
 を敷く髮剝岩屋ハ市瀬より御前登る路一里余ふ  
 あり高十五間幅二間仙人岩屋ハ髮剝岩屋の上二十町  
 許り有り數個の岩石恰築山のぶ  
 温泉 東麓尾添野の東南湯谷中より温泉水を發し  
 又西方雄谷中字三枚壁より湧出す西麓ハ市瀬より河内  
 湯有り

奇品 真黒の靈鷲一雙常ふ山中の高瀑壁間は拙む  
 兩翼を張りて飛るときは甚大四間より余り舞上りて雲ふ  
 へる是を古來白山の玄鷲と云ふ又白額の熊あり首  
 尾の徑二間より及ぶ人を恐るが獵人百發も傷らぬ  
 中らば古來之を白山の神熊と云ふ又鷲鳥多し雲霧  
 起りて人路を失ふはあり導くこと  
 産物 大鷹、獺、羊、硫黄、黄連、桔梗、芍薬、大黃、厚朴、  
 柏、檜、楠、等ありその他瞿麥、車百合、輪寶菊、地榆、黑百合、  
 五鍼松ハ登山の人携へ歸りて翫賞す



金城勝覽圖誌卷之下終

明治三十七年七月廿九日印刷同年  
八月五日發行編輯兼發行石川縣  
金澤市河原街七十一番地雪湖平岩  
晉印刷兼發行者同縣金澤市南町三  
十五番地觀文堂池善平



